

「あなたの動機は何ですか。」

20歳の頃、アラスカのヘインズという小さな村のバイブルキャンプでひと夏、働いたことがあります。そのキャンプ場は「Rainbow Glacier Camp」と言いまして、その名のようにキャンプ場の目の前に雄大な氷河がありました。目の前をムースの親子が歩き、空を見上げれば白頭鷲が悠々と空を飛んでいるような場所です。

そこには電気が通っていないので、夜になりますと、と言いましても夏のアラスカですから、基本的に夜はなく、夜中2時、3時でもまだ薄暗いのです。それでもやはり電気は色々必要で夜になると発電機をつけました。芝刈り機を作動させるように、ヒモを何回か引っ張ると発電機が動き出し、光が灯ります。氷河の前に、真空管の中にあるようなアラスカの夜の静寂、その発電機の音を聞きながら、夜更けまで読書をした日々を忘れることができません。

風変わりな譬えに聞こえるかもしれませんが、しかし、私たちの心の中にも私達を動かす発電機があります。私たちの言動を駆り立てている、その源となるものです。その発電機を私達は「動機」と呼びます。この私達の動機には色々なものがあり、それは人によって異なります。そのいくつかをまず今日は見てまいりましょう。まず第一に恐れという動機です。

1) 恐れ

アメリカにいて、もしかしたらいつか居合わせることがあるのではないかと恐れていることがあります。それはどこかで強盗と鉢合わせになるということです。もう、このようなことは大きなニュースにならないほどに、このサンディエゴでも時々、この事件は起きています。自分がよく行く銀行とか、自分が立ち寄っているコンビニエンスストアに強盗が入ったということは珍しい話ではありません。

思うのです。いつか銀行のデスクで必要なことを書きこんでいる時に、目の前の窓口で銃を突きつけてお金を奪おうとしている強盗に遭遇することがあるかもしれない。言うまでもなく、その時の原則は強盗が望むものを全て渡すことです。もちろん、渡す理由はないし、渡したくないものです。しかし、渡します。なぜなら私には銃口が向けられているからです。銃口を向けられて恐れを感じない人はいないでしょう。恐れは私達が願っていない言動へと私達を駆り立てま

す。そして、その恐れは銃口を向けられるというようなことだけではありません。

人の目を恐れる人がいます。人にどう思われているかを恐れるのです。その恐れがその人の言動をコントロールします。本当はしたくないことなのに、本当の自分はそのような自分ではないのに、人の目を恐れて心にないことを言ったり、したりします。

イエス様は度々、出会う人に言いました、「恐れるな」。どんなに装っていても、神の目に人は恐れを持つ者と見えました。恐れは確かに私達を動かす動機です。二つ目、それは物質主義という動機です。

2) 物質主義

説明するまでもない、これは私達の現代社会に蔓延しているものです。アメリカ合衆国はおそらく世界一の物質消費大国でしょう。多くの物を所有すること、大きなものを所有すること、そのことでより幸せになるという神話の中にこの国はあるように思えます。

確かにこの動機は私達を突き動かします。時に人は健康を害しても、本来、最も大切にすべきものを犠牲にしてまでも、このことを成し遂げようとします。豊かになるために心と体を壊すほどに働き、実際にそれ故に体を壊し、稼いだ全てのものをその治療のために当てなければならない、そんなことがないとは言えない世の中です。休日を返上して働き、豪邸を手に入れたけれども、気がついてみれば、広いリビングに共に座って会話をする者が誰もいなくなっていたなんて話はきっとこの国のいたるところに発見することができることでしょう。

アメリカに来た頃、よく言われました。車の中には見える物を何も置いておくな。たとえクォーターでも外から見えたら、ガラスを壊されるから。この世界には10ドルで殺人を請け負うような人間がいくらでもいるのです。

3) 受容

私達は日々、様々な人間との関わり合いの中、生きています。それは私達の親であったり、配偶者であったり、子供や上司、友人であったりします。そんな人達との関係が健全であればいいのですが、時にその人達に受け入れられようと、その人達の要求に応えようとする場合があります。その要求に応えるに価するものなのか、違うのか、それはあまり関係なく、その人に受け入れられようと必死になるのです。

いつも人の要求に全て応えようとして、心も体もまいってしまう人がいます。いつも必ず、親の期待に応えることを心に植えつけられて育った子供は親が高齢になっても、それを全うしようとし、親が召されられても自分を責め続けます。

全ての人に好かれようとするあまり、自分の魂をすり減らして、自分を見失ってしまう人がいます。失敗に秘訣があるとすれば、それはすべての人を喜ばせようとする事です。主イエスは言われました「人は誰も二人の主人に兼ね仕えることはできない」（マタイ6：24）。

4) 妬み

いつの世にも妬みというものは存在します。アダムとエバの二人の息子、兄の弟に対する妬みが、人類最初の殺人へとつながりました。妬みの歴史は人間の始まりまでさかのぼるのです。この妬みについてイスラエルの三代目の王、ソロモンが興味深いことを書いています。

「わたしは全ての労苦と、すべての巧みなわざを見たが、これは人が互いにねたみあってなすものである」（伝道の書4章4節）。ある英語訳聖書は「成功のための基本的な原動力となっているものは、ねたみと嫉妬であることが分かった」とあります。自分の生き方を分析してみて、自分が達成してきた事の背後にあった原動力は妬みであったと知ることは大きな驚きであり、私たちは愕然とすることでしょう。しかし、ソロモンが言っていることは確かに的を得ています。

同期のあいつが自分よりも早く出世した。同じことをしてきたのにおかしい。よし、あいつには負けない。これから仕事に全てを注いで、あいつを追い越そう。あの会社の製品はわが社のものよりも多く売れている。同じようなものなのに、宣伝がよかったのだろうか。よし、うちはあの製品よりももっといいものを開発しよう。ソロモンが言うように、こうして人は物事を達成し、経済は発展しているのかもしれない。

5) 罪責感

私たちの心にもし「罪責感という発電機」すなわち、自分が過去にしてしまった何かに対する罪意識があるとすれば、私たちはその事に対する後悔と恥ずかしさ、そしてその償いに駆り立てられて生きています。

すなわち、恥ずかしさや後悔を隠すために、自分を飾ったり、強く見せたり、失敗を恐れるために消極的になったり、自分は償いの人生を送らなければならないのだという思いが心を支配しています。

すなわち、その人は過去の出来事に自分の現在と未来を託しているのです。傍らから見ると、なんでそこまでして自分の心と体を傷み続けるのというような方がおりますが、その人は自分は成功してはいけない、幸せになってはいけないのだということを心に刻んでおりますゆえに、自分の幸せや成功を台無しにすることにより、自分の罪の責めを償い続けているのです。

以上、5つのことを挙げてきましたが、もちろん、私達を突き動かすものは他にもたくさんあります。しかし、いかがでしょうか。これら五つのことについて、私達が自らに問いかけたいことは、それらは「健康的な動機なのか」ということです。何かに対する恐れに支配されながら生きていく。日々、めまぐるしく私たちの目の前を通り過ぎていく物だけを追い求めて生きていく。人の期待に応えようとして生きていく。あの人よりも！と嫉妬をエネルギーにして生きていく！何かに対する罪意識からの罪滅ぼしのためにこれからも生きていく！私達の言動がこれらによって引き出されること、私にはどうしてもそれでいいのだとは思えません。

これらの動機に生きた人にイスラエルの初代の王、サウロがいます。彼は神の言葉に従わず、それゆえに心に罪責感をもっていました。それゆえに色々とその罪責感を償う、隠すような言動をしますが、それは彼をさらなる混乱へと導きました。神様から戦の勝利によって得たものを全て滅ぼせ、何一つ、残すなど言われながら、それらに目がくらみ、肥えた家畜を自らの所有としようとします（サムエル上15章）。

そして、それゆえに神の前に王座を失います。さらに彼は神に祝福されている自分の部下ダビデを妬み、血なまこになってダビデを追跡します。このような時の彼の言動に一貫性はなく、その心が混乱していることが分かります。そして、彼は精神を病み、戦死するのです。彼の人生は自分の心にある不健全な動機に振り回された人生でありました。そして、その人生は悲しいものとなりました。

主にある兄弟姉妹、私達の人生は限られているのです。もしそれが1000年あるのなら、今日、牧師が言ったことは納得できないからと、一つ一つの動機を試してみたらいいと思います。でも、もし、これらのことは不健全なものであると思われるのなら、私達は私達が持つべき動機を見出し、それに生きるべきです。

残されている時間は多くはないのですから。そして、そのために聖書は私達の手元にあるのです。

私達を突き動かすものの一つに「目的」があると聖書は言います。そして、それは私達が作り出す目的ではなく、私達に与えられている目的です。二週間前にもお話ししました。そのものを造った人がその造ったものの目的を決めることができる。

そう考えるのなら、私達を造られた神だけが私達に目的を与えることができます。そして、私達はその目的を聖書から知ることができるのです。これは人間だけが持ちうるもので、家で飼っている猫や犬が目的を持って生きてはいないのです。

二週間前に大学の哲学教授であった博士が世界中の著名な哲学者、科学者、作家、そして知識人ら250人に「人生の意味とは何でしょうか」と問いかける手紙を書いたというお話しをしましたでしょう。

ある人は、その人なりの最善の見解を提供し、ある人は思いつきに頼らざるを得なかったことを認め、またある人は正直に全く見当もつかないと答えました。さらには多くの知識人たちがこの教授に「もし人生の目的が分かったら教えて欲しい」という返事を書いてきたというのです。

多くの私達は人生の意味を知らずに、すなわちその目的を知らずに、忙しさに身を置き、がむしゃらに生きています。中には霊媒師や占いに頼ってまで自分の目的を私達は求めます。しかし、そこから私達は生きる意味と目的を知ることはできません。人間の最大の悲劇は死ぬことではありません。何のために生きているのか分からない人生ほど辛いものはないのです。

聖書、エレミヤ29章10節—14節にはこのような御言葉が記されています。⑩主はこう言われる、バビロンで70年が満ちるならば、わたしはあなたがたを顧み、わたしの約束を果たし、あなたがたをこの所に導き帰る。⑪主は言われる、わたしがあなたがたに対していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。⑫その時、あなたがたはわたしに呼ばわり、来て、わたしに祈る。わたしはあなたがたの祈を聞く。⑬あなたがたはわたしを尋ね求めて、わたしに会う。もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、⑭わたしはあなたがたに会うと主は言われる。わたしはあなたがたの繁栄を回復し、あなたがたを万国から、すべてわたしがあなたがたを追

いやった所から集め、かつ、わたしがあなたがたを捕われ離れさせたそのもとの所に、あなたがたを導き帰ろうと主は言われる。

このエレミヤ書はその名の通りエレミヤという人によって書かれたものです。彼は紀元前600年頃、当時の南ユダ王国に生きた預言者でした。南ユダ王国には幾人かの善良な王が出たのですが、その終りにおいては暴君が生まれ悪政がなされ、国民は道徳的にも最悪の状態になっていました。その状態はもはや回復の余地がないほどで、エレミヤはその民の状態をこのように表現しています。

エレミヤ記13章23節—「エチオピア人はその皮膚を変えることができようか。豹はその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」。彼らは悪に慣れていたといいます。彼らは悪の習慣に毎日、生きていたのです。そんな彼らが立ち直ることはエチオピア人の皮膚を変え、豹の斑点様表を変えるほどに難しいというのです。

エレミヤ記2章32節—「おとめはその飾り物を忘れることができようか。花嫁はその帯を忘れることができようか。ところが、わたしの民のわたしを忘れた日は数えがたい」。彼らは完全に神を忘れ、各々が自分の心を突き動かす思いに生きていました。

その動機から生まれる言動の邪悪さを見るについて、彼らに対して主はこう言われました「たといモーセとサムエルとがわたしの前に立っても、わたしの心はこの民を顧みない」（エレミヤ記15章1節）。そして、このような預言が語られました「この地はみな滅ぼされて荒地となる。そして、その国々は70年の間、バビロンの王に仕える」（エレミヤ記25章11節）

この言葉はこの後、南ユダ王国がバビロンに滅ぼされて、バビロンに捕囚の民として連れて行かれてしまう、俗にいうバビロン捕囚によって成就しました。このことは世界史が今日、証明している通りです。

皆さん、この南ユダ王国の民は私達と異なる惑星からきた者達ではなく、私達と同じ人間です。故に時代は違えど彼らの心にあった動機は私達も共有するものであり、そのことゆえに彼らはバビロンに捕らえられていったということを私達は知らなければなりません。

しかし、神様はその彼らに対してこう言われたのです「バビロンで70年が満ちるならば、わたしはあなたがたを顧み、わたしの約束を果たし、あなたがたをこの所に導き帰る。わたしがあなたがたに対していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであ

り、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである」（10節－11節）と。

あなたがたは、自分で蒔いたものを刈り取るために、捕囚民としてバビロンで70年を過ごすことになるだろう。しかし、その時が終わるならば、私はあなたがたを顧みて、そこからの解放を告げるであろう。

私はあなたがたに対して計画を、目的を持っている。それをあなた方に与えよう。そして、その目的はあなた方が現に今、向かいつつある災いに導くようなものではない。それは一時的な、はかない、自分と人を傷つけることによって得るような、何をしても空しさに満ちてしまうようなものではない。

それは、あなたがたに世が与えるものとは違う心の平安を与えるものであり、あなたがたに未来を与え、希望を与えるものなのだ。それこそがあなた方の人生を駆り立てるものになるべきものなのだと言っているのです。

先々週もお話しましたように私たちは偶然の産物ではありません。神の愛によって命与えられたものです。そして、この私たちの造り主であるお方は私たちに対して計画を持っていてくださるということです。こう言いますと「なんだ人間はロボットのようなもので神が自由に自分の人生を操っているのだ」と思いがちです。

しかし、そのような意味ではなく、私たちが父なる神の子として本来、最もよき生涯を送ることができるようにとその目的を私たちを与えて下さるということなのです。私たちはこの神から与えられた目的を宿命としてとらえるのではなく、この目的を目指して自らの意思のもとに、そのことを選択して生きていくことができるのです。

この目的を自分のものとした使徒パウロはかつて言いました「兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かって体を伸ばしつつ、目標を目指して走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」（ピリピ3章13節－14節）。

パウロはその生涯、一点を見つめて走り通した人です。その生涯には人間的に見れば、色々な困難がありました。しかし、彼の心には神様から与えられた動機があり、その動機は彼をして生涯、目標を目指して走りとおし、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得るといったことだったのである。それが彼を駆り立てたのです。

2018年6月24日 「あなたの動機は何ですか？」

かつて私はギリシアにあるピリピの町を訪れました。そこはパウロも訪れて伝道した町です。その町の一角にローマ帝国が作った、石の並ぶ当時の街道がそのまま残っていました。そう、それはパウロの時代そのままのもので、ガイドによればパウロもその石の上を歩いたであろうということです。

私はその石の一つに手を置いてみました。今は朽ちてしまった遺跡として残るピリピの町ですが、目を閉じると当時の賑やかな喧騒が聞こえてくるようでした。そして、パウロの息遣いが聞こえてくるように思えました。彼がハッハッとこの街道を歩く息遣いです。この道を通り彼はアテネにそして、エペソへと向かったに違いありません。行く手には諸々の困難があることは分かっていました。しかし、そこに向かうべく、彼は前を向いたのです。そんな彼を駆り立てていたもの、それは彼に神様から与えられた彼の生きる目的でありました。

今朝、皆さんにお尋ねしたいのです。今、あなたを駆り立てているものは何ですか。そんなこと、考えたこともないという方がいるかもしれません。それは恐れですか、妬みですか、豊かさですか、人の目ですか、それとも罪責感ですか。

もし、それらが皆さんの今日の言動や明日の歩みの動機となっているのなら、それらはおそらく私達の残りの人生の原動力となっていくことでしょう。言うなれば、それらが私達の人生を握っているということです。

しかし、我々の本来の目的はそのようなものではありません。私達に命をくださったお方の目的に生きるということ、その時に私達は人としてフルに、自分の人生を生きているということができるとのことです。

私達の動機を変えるために必要なことは、その動機に勝る動機を自分のものとすることです。その動機が私達の心に据えられていくのなら、かつて私達を突き動かしていた諸々の動機は私達の心を支配する、その効力を失っていくのです。

「兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かって体を伸ばしつつ、目標を目指して走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」。

皆さん、思いませんか。自分が召されるその瞬間まで、このパウロが抱いたパッションを持ち続けていたいと。そして、この思いと共にゴールのテープをきりたいと。お祈りしましょう。